

「身を横たえて眠り、わたしはまた、目覚めます」詩篇3篇

一日を始め、一日を終わるとき、深呼吸をして息を整え、神に心を向けましょう。用事を思い出し動き初めてしまい、また、後悔で眠れない夜とならないために。心ざわつくとき、青草に座りイエス様の話に耳を傾ける姿を思い浮かべましょう。あれ、あそこに、ペトロさん、ヨハネさんがいるではないですか。そして、隣に私と、友達がいるではありませんか！爽やかな風が吹いています。まず、詩編3編を読んでみましょう。（ここでしばらく時間をとります。僅か1分です）

この詩は、ダビデが息子アブサロムの反逆により、エルサレムから都落ちした危機の経験から生まれたとされています。祈りの最初の言葉は、「ヤハウエ（アドナイ）＝主よ」です。祈りは主のみ名を呼ぶことから始まります。祈ることができる、呼びかけるお方があるということ、しかも、どのような困難な状況に置かれても主なる神に呼びかけ、祈れるということは恵みに満ちたことです。短いこの詩には「主なる神」が6度も用いられています。

祈り手は、「多くの者がわたしに立ち向かい、彼に神の救いなどあるものかと言う」（2-3節）と嘆きます。「多い」という言葉が2つの節に3度も登場します。苦労の連続。しかも「彼には神の助けがない」という信仰的侮りの声もあるのです。人生はときに過酷です。人は、他者の敵意に囲まれて生きています。意見、性格、価値観の対立はどこにでもあります。それらの背後に「彼に神の救いなどない」という神への挑戦が横たわっています。

そのような戦いの中で、主なる神は、「盾」として私たちを取り囲み守ってくれます。弓矢が飛んできたり、剣で切りかかれたとき、素手ではないこと、裸ではないことは心強いことです。また、主なる神は「わが栄え」と呼ばれています。息子アブサロムの反逆に合い、王の位を剥奪され、エルサレムから都落ちしていくダビデ。キデロンの谷をくだり、オリブ山を経て、ヨルダン川を渡り、マハナイムの野原で野営します。それはダビデ自分の蒔いた種から生まれたともいえる惨めな出来事でした。忠実な部下ウリヤを殺させ、バテシバを奪い、三男アブサロムを甘やかし、その酷さから、ダビデの右腕軍長ヨアブからは全く馬鹿にされるほどでした。その上、シメイがダビデを激しく呪い、「お前は余りに多くの人の血を流した」と叫びます。まさに、王としての栄誉を剥奪されたその時、神こそが「わたしの栄え」であると告白します。皆さんは、誰からの栄誉を求めていますか？あなたの「盾」である主なる神からでしょうか？

ダビデは肩を落とし、うなだれています。うなだれると姿勢が悪くなり、肩が凝ります。頭を高く挙げましょう。この祈りは、主は「わたしの頭を、高くあげてくださる方」と告白するのです。そして、「主に向かって声をあげれば、聖なる山から答えてくださいます」と言います。ダビデは聖なるシオンの丘、エルサレムから追い出され、祈る場所を失っていますが、主なる神は聖なる山から祈りを聞いて下るのです。神はエルサレムにいますと共に、逃れるダビデの傍らに来てくださるのです。イエス・キリストにおいて！礼拝を共にできない私たち一人ひとりの処へ。

「身を横たえて眠り、また目覚めます」。「主が支えてくださるから」。眠るということは神に委ねることです。でも、神経が過敏になり、張り詰め、不眠症、自律神経のバランスを崩している私たちがいます。主があなたに眠りを与えて下さるように！「主よ、立ち上がって下さい。お救いください」。敵となった軍師アピトペルがその晩のうちに1万2千の軍勢をもってダビデを追撃していればダビデのいのちはなかったことでしょう。しかし、不思議な神の助けがありました。「救いは主のもとにある」。救いは主のものである（口語訳）。彼は自分のことから解放され、今は敵となってしまった自分の民を「神の民」として、執り成し、祝福を祈ります。